

復習シート 第二学年 国語



組	番号	名前

【登場人物の心情を読み取る問題】

1 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「あ、馬出はる、馬出はる。押えろ 押えろ。」一郎はまっ青さおになって叫びました。じつさい馬はどての外へ出たのらしいのでした。どんどん走って、もうさっきの丸太の棒を越えそうになりました。

一郎はまるであわてて、「どう、どう、どうどう。」と言いながら一生けん命走って行って、やっとそこへ着いてまるでころぶようにしながら手をひろげたときは、そのときはもう二匹は柵さくの外へ出ていたのです。

「早く来て押えろ。早く来て。」一郎は息も切れるように叫びながら丸太棒をもとのようにしました。

四人は走って行って急いで丸太をくぐって外へ出ますと、二匹の馬はもう走るでもなく、どての外に立って草を口で引っぱって抜くようにしています。

「そろそろど押えろよ。そろそろど。」と言いながら一郎は一匹きのくつわについた札のところをしっかりと押えました。嘉助かすけと三郎がもう一匹を押えようとそばへ寄りますと、馬はまるでおどろいたようにどてへ沿って一目散に南のほうへ走ってしまいました。

「兄あいな、馬あ逃げる、馬あ逃げる。兄あいな、馬逃げる。」とうしろで一郎が一生けん命叫んでいます。三郎と嘉助は一生けん命馬を追いしました。

ところが馬はもう今度こそほんとうに逃げるつもりらしかったのです。まるで丈たけぐらある草をわけて高みになったり低くなったり、どこまでも走りました。

嘉助はもう足がしびれてしまつて、どこをどう走っているのかわからなくなりました。

それからまわりがまっ蒼さおになつて、ぐるぐる回り、とうとう深い草の中に倒れてしまいました。馬の赤いたてがみと、あとを追って行く三郎の白いシャツポが終わりにちらっと見えました。

嘉助は、仰向けになつて空を見ました。空がまっ白に光つて、ぐるぐる回り、そのこちらを薄いねずみ色の雲が、速く速く走っています。そしてカンカン鳴っています。

嘉助はやっと起き上がつて、せかせか息しながら馬の行ったほうに歩き出しました。草の中には、今馬と三郎が通つた跡らしく、かすかな道のようなものがありました。嘉助は笑いました。そして、（ふん、なあに馬どこかでこわくなつてのっこり立ってるさ、）と思いました。

そこで嘉助は、一生懸命それをつけて行きました。

ところがその跡のようなもの、まだ百歩も行かないうちに、おとこえしや、すてきに背の高いあざみの中で、二つにも三つにも分かれてしまつて、どれがどれやらいつこうわからなくなつてしまいました。

嘉助は「おうい。」と叫びました。

「おう。」とどこかで三郎が叫んでいるようです。思い切つて、そのまん中のを進みました。

けれどもそれも、時々切れたり、馬の歩かないような急な所を横ざまに過ぎたりするのでした。

空はたいへん暗く重くなり、まわりがぼうつとかすんで来ました。冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が切れ切れになつて目の前をぐんぐん通り過ぎて行きました。

（ああ、こいつは悪くなつて来た。みんな悪いことはこれから集たがつてやつて来るのだ。）

と嘉助は思いました。全くそのとおり、にわか馬の通つた跡は草の中でなくなつてしまいました。

（ああ、悪くなった、悪くなった。）嘉助は胸をどきどきさせました。

草がからだを曲げて、パチパチ言つたり、さらさら鳴つたりしました。霧がことに滋しげくなつて、着物はすつかりしめつてしまいました。

嘉助は咽喉のどいっばい叫びました。

「一郎、一郎、こつちさ来う。」ところがなんの返事も聞こえません。黒板から降る白墨の粉のような、暗い冷たい霧の粒が、そこら一面踊りまわり、あたりがにわかシインとして、陰気に陰気になりました。草からは、もうしずくの音がポタリポタリと聞こえて来ます。

嘉助は、もう早く一郎たちの所へ戻ろうとして急いで引返しました。けれども、それは前に来た所とは違つていたようでした。第一、あざみがあんまりたくさんありましたし、それに草の底にさつきなかつた岩かけが、たびたびころがつていました。そしてとうとう聞いたこともない大きな谷が、いきなり目の前に現われました。すすきがざわざわざわつと鳴り、向こうのほうは底知れずの谷のように、霧の中に消えているではありませんか。

風が来ると、すすきの穂は細いたくさんの手をいっばいのばして、忙しく振つて、

「あ、西さん、あ、東さん、あ、西さん、あ、南さん、あ、西さん。」なんて言っているようでした。

嘉助はあんまり見つともなかつたので、目をつむつて横を向きました。そして急いで引返しました。小さな黒い道がいきなり草の中に出て来ました。それはたくさんの馬のひづめの跡でできあがつていたのです。嘉助は夢中で短い笑い声をあげて、その道をぐんぐん歩きました。

けれども、たよりのないことは、みちのはばが五寸ぐらいになつたり、また三尺ぐらいに変わつたり、おまけになんだかぐるつと回つているように思われました。そして、とうとう大きなたつぺんの焼けた栗の木の前まで来た時、ぼんやり幾つにも別れてしまいました。

そこはたぶんは、野馬の集まり場所であつたでしょう。霧の中に丸い広場のように見えるのです。

嘉助はがっかりして、黒い道をまた戻りはじめました。知らない草穂が静かにゆらぎ、

少し強い風が来る時は、どこかで何か都合図をしてでもいるように、一面の草が、それ来たつとみなからだを伏せて避けました。

空が光ってキインキインと鳴っています。

それからすぐ目の前の霧の中に、家の形の大きな黒いものがあらわれました。嘉助はしばらく自分の目を疑って立ちどまっていたが、やはりどうしても家らしかったので、こわごわもっと近寄って見ますと、それは冷たい大きな黒い岩でした。

空がくるくるくると白く揺らぎ、草がバラツと一度にしくを払いました。

（間違つて原の向こう側へおれば、又三郎もおれも、もう死ぬばかりだ。）と嘉助は半分思うように半分つぶやくようにしました。それから叫びました。

「一郎、一郎、いるが。一郎。」

また明るくなりました。草がみないっせいによるこびの息をします。

「伊佐戸の町の、電気工夫の童あ、山男に手足いしばらえてたふだ。」といつかだれかの話した言葉が、はつきり耳に聞こえて来ます。

そして、黒い道がにわかになくなってしまいました。あたりがほんのしばらくしいんとなりました。それから非常に強い風が吹いて来りました。

空が旗のようにぱたぱた光って飜り、火花がパチパチと燃えましました。嘉助はどうとう草の中に倒れてねむってしまった。

《宮沢賢治「風の又三郎」より抜粋》

問1 ——線部「嘉助は夢中で短い笑い声をあげて、その道をぐんぐん歩きました」とありますが、そのときの「嘉助」の気持ちを次の1から4までのうち、最も適切なものを一つ選びなさい。**レベル6・7**

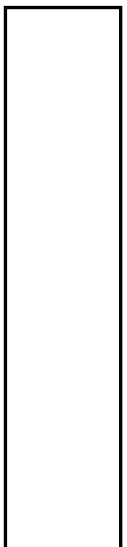
- 1 聞いたことのない音が、たくさん聞こえて驚いている気持ち。
- 2 恐がっている自分に気づき、恥ずかしい気持ち。
- 3 友達が呼んでいる声が聞こえ、安心した気持ち。
- 4 馬の通った道を見つけることができ、喜んでる気持ち。

問2 この文章の表現の工夫について、山田さんと鈴木さんの会話を読み、（ ）に

当てはまる言葉を文章中から書き抜きなさい。**レベル8・9**

山田君「この文章は、嘉助の気持ちの変化が情景描写でも、よく表れているね。僕は、空についての表現の変化がとても印象に残っているよ。」

鈴木さん「そうだね。私は別の情景に興味を持ったよ。『冷たい大きな（ ）』を読んだときは、嘉助の希望が完全に無くなってしまったかのような衝撃を感じたよ。」



復習シート 第二学年 国語



組	番号	名前
---	----	----

模範解答

【本文略】

問1 —線部「嘉助は夢中で短い笑い声をあげて、その道をぐんぐん歩きました」とありますが、そのときの「嘉助」の気持ちを次の1から4までのうち、最も適切なものを一つ選びなさい。レベル6・7

- 1 聞いたことのない音が、たくさん聞こえて驚いている気持ち。
- 2 恐がっている自分に気づき、恥ずかしい気持ち。
- 3 友達が呼んでいる声が聞こえ、安心した気持ち。
- 4 馬の通った道を見つけることができ、喜んでいる気持ち。

4

気持ちを表す語彙に惑わされず、これまでの物語の展開と、笑い声をあげたきっかけを見つけて考えましょう。

問2 この文章の表現の工夫について、山田さんと鈴木さんの会話を読み、（ ）に当てはまる言葉を文章中から書き抜きなさい。レベル8・9

山田君「この文章は、嘉助の気持ちの変化が情景描写でも、よく表れているね。僕は、空についての表現の変化がとても印象に残っているよ。』

鈴木さん「そうだね。私は別の情景に興味を持ったよ。『冷たい大きな（ ）』を読んだときは、嘉助の気持ちにあったかすかな希望が完全に無くなってしまったかのような衝撃を感じたよ。」

黒い岩

情景描写とは、心情が表れていると考えられる風景や景色です。「嘉助」の見た風景や景色で希望が無くなったような「冷たさ」を感じさせた描写を見つけてみましょう。

似た表現では「黒いもの」とありますが、正解とは言えません。嘉助は「黒いもの」を家（のようなもの）と誤っていたので、その時点では希望を完全に失っていないことが分かります。また、「冷たい」ことも黒い岩と分かってからの表現です。

復習シート 第二学年 国語



組	番号	名前
---	----	----

【読むことの問題】レベル7～9

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ここまでのあらすじ」 七歳の保吉は父親と玩具屋を訪れ、店主から幻灯の映し方（ガラス板の面を光でスクリーンに映す機械の使い方）を聞いている。

「あのぼんやりしているのはレンズのピントを合せさえすれば——この前にあるレンズですな。——すぐにごらんのとおりはつきりなります。」

主人はもう一度および腰になった。と同時にしゃぼんだまはみるみる一枚の風景画に変わった。もつとも日本の風景画ではない。水路の両側に家々のそびえた、どこか西洋の風景画である。時刻はもう日の暮れに近いころである。三日月は右手の家々の空にかすかに光を放っている。その三日月も、家々も、家々の窓の薔薇の花も、ひっそりとたたえた水の上へ鮮やかに影を落としている。人影はもちろん、見たしたところかもめ一羽浮かんでいない。水はただ突き当たりの橋の下へまっすぐにひとすじつづいていく。

「イタリヤのベニスの風景でございます。」

三十年後の保吉にヴェネチアの魅力を教えたのはダンヌンチオの小説である。けれども当時の保吉は、この家々だの水路だのにただたよりのない寂しさを感じた。彼の愛する風景は、大きい丹塗りの観音堂の前に無数の鳩の飛ぶ浅草である。あるいはまた高い時計台の下に鉄道馬車の通る銀座である。それらの風景に比べると、この家々だの水路だのはなんとという寂しさに満ちているのであろう。鉄道馬車や鳩は見えなくてもよい。せめてはむこうの橋の上に一列の汽車でも通っていたら、——ちやうどこう思ったとたんである。大きいリボンをした少女が一人、右手に並んだ窓の一つから突然小さい顔を出した。どの窓かははつきり覚えていない。しかしだいたい三日月の下の窓だったことだけはたしかである。少女は顔を出したと思うと、さらにその顔をこちらへむけた。それから——遠目にも愛くるしい顔に疑う余地のないほほえみを浮かべた！ が、それは掛け値のない一、二秒の間のできごとである。思わず「おや」と目を見はった時には、少女はもういつの間にか窓の中へ姿を隠したのであろう。窓はどの窓も同じように人気のない窓かけを垂たらしめている。……

「さあ、もう映しかたはわかったらう？」

父の言葉はぼうぜんとした彼を現実の世界へ呼びもどした。父は葉巻をくわえたまま、

退屈そうに後ろにたたずんでいる。玩具屋の外の往来もあいかわらず人通りを絶たないらしい。主人も——きれいに髪を分けた主人は小手調べをすませた手品師のように、妙に蒼白あわしろい頬のあたりへ満足の微笑をただよわせている。保吉は急にこの幻灯を一刻も早く彼の部屋へ持って帰りたいと思いだした。……

保吉はその晩父といっしょに蟬せみを引いた布の上へ、もう一度ヴェネチアの風景を映した。中空の三日月、両側の家々、家々の窓の薔薇の花を映したひとすじの水路の水の光り、——それは皆前に見たとおりである。が、あの愛くるしい少女だけはどうか今度は顔を出さない。窓という窓はいつまで待っても、だらりと下がった窓かけの後ろに家々の秘密を封じている。保吉はどうとう待ち遠しさにたえかね、ランプの具合などを気にしていた父へ（注4） 歎願するよう話しかけた。

「あの女の子はどうして出ないの？」

「女の子？ どこかに女の子がいるのかい？」

父は保吉の問いの意味さえ、はっきりわからない様子である。

「ううん、いはしないけれども、顔だけ窓から出したじゃないの？」

「いつさ？」

「玩具屋の壁へ映した時に。」

「あの時も女の子などは出やしないさ。」

「だって顔を出したのが見えたんだもの。」

「何を言っている？」

父はなんと思っただか保吉の額へ手のひらをやった。それから急に保吉にもつけ景気（注5）とわかる大声を出した。

「さあ、今度は何を映そう？」

けれども保吉は耳にもかけず、ヴェネチアの風景をながめつづけた。窓は薄明るい水路の水に静かな窓かけを映している。しかしいつかはどこかの窓から、大きいリボンをした少女が一人、突然顔を出さぬものでもない。——彼はこう考えると、名状（注6）のできぬつかしさを感じた。同時に従来知らなかった、あるうれしい悲しさをも感じた。あの画の幻灯の中にちらりと顔を出した少女は、じっさい何か超自然の霊が彼の目に姿を現あわしたのであるか？ あるいはまた少年に起こりやすい幻覚の一種に過ぎなかったのでしょうか？ それはもちろん彼自身にも解決できないのにちがいない。

（芥川龍之介「少年」による。）

（注1） ベニスⅡヴェネチア。イタリア北東部位置する都市。「水の都」の別名をもつ。

（注2） ダンヌンチオⅡイタリアの詩人、小説家、劇作家。

（注3） 丹塗りⅡ赤または朱色に塗ってあること。また、塗ってあるもの。

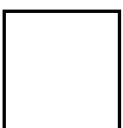
（注4） 歎願Ⅱ事情を述べて熱心に願うこと。

（注5） つけ景気Ⅱ実際はそうではないのに景気がよいように見せかけること。

（注6） 名状の出来ぬⅡ言葉で言い表すことができない。

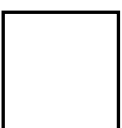
問一 ——線部①「それは掛け価のない一、二秒の間のできごとである」とありますが、「掛け価」はこの場合、物事を大げさに言うことを意味します。この部分についての説明として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 少女の映っていた時間が、ほんのわずかな間のできごとであったということ。
- 2 少女の映っていた時間が、ずいぶんと長い間のできごとであったということ。
- 3 ヴェネチアの風景の映っていた時間が、ずいぶんと長い間のできごとであったということ。
- 4 ヴェネチアの風景の映っていた時間が、ほんのわずかな間のできごとであったということ。



問二 ——線部②「『さあ、今後は何を映そう?』けれども保吉は耳にもかけず、ヴェネチアの風景をながめつづけた。」とありますが、この場面についての説明として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 父は少女が映っている画が他にもないか探そうとしたが、保吉は少女が再び現れることはないか諦めている。
- 2 父は他の画を映し出すことを提案したが、保吉は少女がもう一度幻灯の画に現れるのではないかと考えている。
- 3 父はヴェネチアの風景の映り具合を気にしたが、保吉は自分が愛する浅草や銀座の風景の映り具合を気にしている。
- 4 父は保吉に幻灯を映すように促したが、保吉はヴェネチアの静かな風景がとても気に入ったので父の発言に答えずにいる。



復習シート 第二学年 国語



組	番号	名前
模範解答		

【本文略】レベル7～9

問一 —— 線部①「それは掛け価のない一、二秒の間のできごとである」とありますが、「掛け価」はこの場合、物事を大げさに言うことを意味します。この部分についての説明として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 少女の映っていた時間が、ほんのわずかな間のできごとであったということ。
- 2 少女の映っていた時間が、ずいぶんと長い間のできごとであったということ。
- 3 ヴェネチアの風景の映っていた時間が、ずいぶんと長い間のできごとであったということ。
- 4 ヴェネチアの風景の映っていた時間が、ほんのわずかな間のできごとであったということ。

1

問題文にある「掛け値」の意味を基に考えると、「大げさに言うわけではないが、本当に一、二秒の間のできごとであった」ということを意味していることがわかります。文脈に即して語句の意味をとらえましょう。

—— 線部①のすぐ後の一文に、「少女」や「いつの間にか…」といった言葉が書かれていることにも注目しましょう。



問二 —— 線部②「『さあ、今後は何を映そう？』けれども保吉は耳にもかけず、ヴェネチアの風景をながめつづけた。」とありますが、この場面についての説明として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 父は少女が映っている画が他にもないか探そうとしたが、保吉は少女が再び現れることはないかと諦めている。
- 2 父は他の画を映し出すことを提案したが、保吉は少女がもう一度幻灯の画に現れるのではないかと考えている。
- 3 父はヴェネチアの風景の映り具合を気にしたが、保吉は自分が愛する浅草や銀座の風景の映り具合を気にしている。
- 4 父は保吉に幻灯を映すように促したが、保吉はヴェネチアの静かな風景がとても気に入ったので父の発言に答えずにいる。

—— 線部②のすぐ後に、「いつかはどこかの窓から、大きなリボンをした少女が一人、突然顔を出さぬものでもない」などの文から、考えてみましょう。

2